
Sky Harts

空想～エアロ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S k y H a r t s

【Nコード】

N 2 1 2 2 I

【作者名】

空想ゝエアロゝ

【あらすじ】

空の心を司るといふ神竜に自分たちの町を壊滅させられた黒き侍銀二。

銀二は神竜への復讐のためハンターとなり、仲間と共に成長していく。

涙あり笑いありの壮大なハンターたちの物語！！

黒い侍（前書き）

楽しく読んでもらえたらうれしいです。
てゆうか読んでもらえただけで感動です。

黒い侍

「ガアッガアッ！」

森の中でランポスの声が響いている。

そのランポスの前には一人の少年が立っていた。

その少年の格好は独特で髪の毛はボサボサ、黒い浴衣、

腰には2本の黒い太刀と森を通るにはあまりにも変な格好であった。

「めんどくせえなあ」

そついうと少年は腰から一本太刀を抜き、身構えた。

ランポスが飛び込んでくる。

しかし少年はなんの動揺もせず太刀を振り、

ランポスを真つ二つにしてしまった。

この森ランポス多いなあ・・・通らなきゃよかった・・・」

そんな独り言を呟きながらも少年はまた歩き出した。

しばらくすると森を抜け大きな町が見えてきた。

このアズカード大陸最大の都市「ラルグラド」である。

この町は山と海に囲まれ、人がよく集まってくるので肉食のモンスターが頻繁に来るらしい。

そのため2年に一度ハンター試験を行い、

モンスターの数を減らしているそうだ。

ここの試験では「スカウト方式」を取り入れているため、

合格率はあまり高くないのだが、参加するハンターは

300人を超える。最近では300人も試験を受けたら

モンスターがいなくなるんじゃないかという声もある。

黒い服の少年「銀二」はこの試験を受けに来たのだった。

「やっとついた……とりあえず、宿とらないと」

銀二はすぐ近くの小さな宿にとまることにした。

もう歩き疲れていたのもあるが、

彼は極度のめんどくさがりなのだ。

「え……と試験は明日だから……寝ようかな……」

彼はやるときはちゃんとやるのだが、

やることのないときはほとんど寝ている。

しばらくして、銀二が気持ちよさそうに寝ていたそのとき、

外からものすごい音と共に悲鳴が聞こえた。

あまりの音に銀二は目が覚め、窓から外をのぞいた。

「んだよ、うるせえなあ・・・」

あくびをしながらだった港のほうに大きなモンスターが見えた。

銀二は双太刀「黒天」を手に、走り出してこう言った。

「寝起きの俺は機嫌が悪いんだ」

港に着くとそこにはラグアクルスという

大きなモンスターが暴れていた。

しかもなかなかのサイズである。

たくさんのハンターが雷で飛ばされていく。

「皆さん非難してください！」

ギルドの人が叫んでいる。

銀二は前にいる野次馬ハンターに「どけ」というと

ラギアクルスめがけて全力で走り出した。

「なんだあガキ！死にてえのか！」とそのハンターに言われたが

言い返さなかった。銀二の目にはもう

ラギアクルスしか見えていなかった。

ラギアクルスは走ってくる銀二に気づき、

雷を放ったが、銀二はそれを

風のようにかわし一本の太刀を抜きながら間合いに入った。

そして、切り上げを放ちながら飛び上がり

もう一本の太刀を抜いた。

銀二はすでにラギアクルスの頭上にいた。

武器を構えながらこう叫ぶ。

「人が気持ちよく寝てんのにうるせえんだよオオオオオ！！」

空中で一回転し、そのまま回転速度を上げていく。

「黒天剣技『黒天旋牙』」

回転で威力の増した斬撃が

硬いはずの、ラギアクルスの首から胴にかけて

いとも簡単に切り裂いていく。

銀二が着地するときには、ラギアクルスは血しぶきを上げ

地面に崩れ落ちていた。

周りから「スゲエ・・・何モンなんだあいつ」などと聞こえる。

銀二は黒天から血をはらい、鞘に収めた。

「さあって、もう一眠りするかな」

たくさんハンターたちに見られながら宿へ帰っていった。

黒い侍（後書き）

初めて書いたんでへたくそです。
これから成長していこうと思うので
もしよければ感想書いてください。

シルクハットの双銃士（前書き）

いやあゝ銀二じゃないんですけど小説書くのってめんどくさいですね・・・。

受験シーズンなのにこんなことしてる俺って一体・・・。

まあそんなこんなでいつのまにか完成しました！！

今回も銀二君はがんばります！！見逃すなよお！！

シルクハットの双銃士

その日の夜、銀二は街の商店街にいた。

銀二は昼によく寝るので夜はほとんど寝ない。

だから夜に買出しに出かけるのだ。

今日は明日の試験のための買出しに来ていた。

「すいませ〜ん。これ5つ」

「はいよ！回復薬グレート5つで500Zだ！」

（声の大きい人だ・・・）と思ったが声には出さなかった。

銀二が帰ろうとしたそのとき、後ろにいたおばさんが声を上げた。

「ドロボー！！その人泥棒よ！！」

その場にいた人たちの目が眼鏡をかけた男に向けられた。

眼鏡男は後ずさりし、全力で走りだした。

銀二は見てなかったかのように宿へ歩き出したのだが

後ろから聞こえた声に引き止められた。

「おい！いくぞ！」

「はあ？」銀二は思わず後ろを振り向いてしまった。

その声の主はシルクハットをかぶった金髪のクールそうな男だった。

「町の治安を守るのもハンターの仕事だろ？いくぞ！」

そういうと銀二の腕をつかみ眼鏡男に向かって走り出した。

「なっおい！なにしてんだよ！」

「お前も行くの。ハンターだろ？」

「人を勝手に巻き込むなっ！」

「いいじゃん、たまにはいいことしたって。」

どうせお前のしたいいいことっておつりの小銭募金したことあるぐらいだろ？」

「うっせーよ！どんだけ俺の心狭いんだよ！！」

そんなことを言いつつも気づいたら銀二も走り出していた。

ちなみに銀二は募金すらしたこともなかった。

「いたぞ！」

そういうとシルクハットの男は腰から2本のうち一本銃を取り出し、

両手で構えた。眼鏡男との距離は50メートルはある。

「こんなとつから狙えんのか？」

銀二がそう聞くと

「もちろん！」とシルクハットの男は答え、引き金を引いた。

「バンッ」という銃声と共に眼鏡男の体勢がくずれた。

（今だ！）銀二は眼鏡男との距離詰め、

鞘に収めたまま黒天を腰から抜いた。

そして走りながら横に剣を振る。

距離を詰めたとはいえ、まだ間合いには入れていない。

しかし、剣を振ったときに飛んでいった黒い鞘が、眼鏡男の

体をとらえていた。眼鏡男は立つ暇もなく銀二に刃を向けられ

「こ、降参します・・・」としか言いようがなかった。

その後来た警察の方が眼鏡男を連れて行った。

「やるじゃんお前」とシルクハットの男が銀二の肩をたたいた。

「ったく・・・めんどくせえことに巻き込みやがって・・・

俺はお前の名前もしらねえっつーの！」

「あ、俺？俺はレオ。16歳で双銃士！よろしくな」

「よろしくじゃねえよ！ってかもうこんな時間！！？
早く帰って寝ないと試験遅刻すんじゃないか！！」

「あ、お前も明日試験？いつしよにパーティ組もうぜ！」

「うっせーよ！！いいかげんにしろっつーの！！」

レオの楽しそうな声が響く中、

銀二は宿に戻った。

朝。銀二は昨日の夜のことですぐに眠れなかったが、

試験会場へ向かった。

会場へつくとなぜかいきなり質問された。

銀二は眠かったため、相手の顔など気にしていなかった。

「名前は？」

「銀二」

「ふん・・・銀二と・・・歳は？」

「16」

「何だよ俺と一緒にじゃなかよ〜」

聞き覚えのある声。（どこで聞いたっけ・・・ハッ！）

銀二が気づいた時にはもう遅かった。

「パーティ登録完了〜」

銀二の前でレオがうれしそうな顔をしていた。

「なにしてくれてんだよ!」

「何って・・・パーティ登録だけど・・・」

「勝手にすんな!!」

「お!クエストペーパーがきた!」

クエストペーパーとは受注したクエストの詳細が書かれた紙である。

「え〜っと・・・イヤンクックだってさ!

よっしや〜やっるぞ〜」

イヤンクックといえば初心者ハンターが練習で

狩りにいくようなモンスターである。

正直なところ、銀二にとっては雑魚モンスターでしかなかった。

完全に話をそらされた銀二は

「ま、いつか・・・」とあきらめた。

銀二とレオはラルグラドの東にある森「ローグの森」でイヤンクックを探すことにした。

しかし銀二はあるものが気になってそれどころではなかった。

「なあ・・・レオ」

「何？」

「その・・・後ろ飛んでる丸いやつ・・・何？」

「試験用の小型カメラだってさ」

「ブーンブーン」

「うつさいから壊す」

「うん。だめだよ？これ壊したら俺たち試験うかないよ？」

だってこのカメラを通してギルドマスターたちが俺たちをスカウトするんだから」

「ブーンブーン」

その通り！といってるかのようにカメラが音を出した。

（イヤンクック殺ったら次はカメラを殺る）

そう心に誓う銀二であった。

そのころ試験会場本部では……。

「はあゝいこれから試験が始まるので

マスターの皆さん！モニターの前に座ってくださいあゝい」

「ことはどんなやつ獲ろうかのおゝ……

やっぱりかわいい娘じゃろおゝそれとそれと……」

「うるさいわねエロジジイ」

「エロジジイというな！無礼者！！」

「もっとまじめにセンスのあるやつ獲ったらどうっスか？」

「これでもちゃんと見とるんじゃない！！」

「あのおゝ……ちゃんとモニター見てもらえます？」

ギルドマスターたちもはしゃいでいた。

「結構奥まできたなゝ」

銀二はそう呟いた。

「イヤンクックどっこだあゝい？」

そういった直後、レオが叫んだ。

「いた!!」

銀二はほっとしたように言う。

「やつとか!」

イャンクツクに近づこうとしたそのとき銀二は、
上に何かがいることに気がついた。

「待てレオ!!」

「ん?」

レオが軽い口調で言った。

突然イャンクツクに火の玉が降り注いだ。

イャンクツクは白目をむき出し、地面に倒れた。

「な、なんだあ?」

「おいおい・・・うそだろ・・・」

上に見えているモンスターには

あまりにも空が似合っていた。

シルクハットの双銃士（後書き）

1話と違って長いです。うん、2倍ぐらいあります。

でも銀二みたいにめんどくさがらず読んでくださって感動です。

涙で前も見えません。できれば感想書いってやってください。

泣き止んだころに見ます。次回も見逃すなよお！！

激闘！空の王者！（前書き）

いやゝ・・・眠い・・・。

眠いのになぜか小説が出来上がっている・・・。

そして気がついたらパソコンがついてる・・・。

これは打てということなのか？どうなってるんだああああ！！！！
って受験勉強しろよ俺・・・。

今回の銀二君も見逃すなよお！！

激闘！空の王者！

そのモンスターは降りてくるなりイャンクックを食べ始めた。

しかし、二人に気づきこちらを見る。

「おいおい・・・あいつは・・・」

「あれってさあ銀二・・・あれだよ・・・」

「「リオレウス！！！！」」

二人は同時にその名を叫んだ。

リオレウス。それはG級ハンターでも恐れる空の王者。

「ガアアアア！！」

リオレウスは二人に向かって咆えた。

「うっせ！！」

「耳が！！」

二人は動きを止めてしまった。

「まずい！」銀二が叫ぶ。

リオレウスが二人めがけて突進してくる。

銀二はレオの腕をつかみ、横へ飛んだ。

「さ、サンキュ・・・」

レオは震えていた。

当然だ。イヤンクックと違ってリオレウスは桁違いに強い。

「武器を持て！やらなきゃやられんぞ！！」

銀二はそういいながら黒天を抜いた。

しかしそういつている間にもリオレウスは再び突進をしてくる。

「はあああああ！！」

銀二は高く飛び、突進してくるリオレウスを上から切りつけた。

しかし、リオレウスの尻尾が銀二に直撃した。

「くっ！」

銀二は飛ばされ、地面に転がる。

「うおおおお！！」

レオも2丁銃を取り出しリオレウスに打ち込んだ。

しかし、リオレウスも火炎をレオに向かって放つ。

「うわっ！あちっ！！」

直撃は避けたが、近くに落ちたためやけどしてしまった。

（つ、強い・・・）二人ともそう思っていた。

「ガアアア！！」

銀二にも火炎が放たれる。

銀二はそれを回避し、リオレウスの翼を斬りつけた。

翼爪が破壊された。

「よしっ！」

銀二がそういった直後、リオレウスの口元から火が溢れ出し咆哮を放った。

「ガアアアアアアア！！！！」

銀二はそれを予測し耳をふさいでいた。

「ちっ！キレたか」そいいながら一歩下がる。

しかしレオはまた「耳いて」と動けなくなっている。

しかもリオレウスはレオのほうを向いている。

そしてまたレオに火炎を放った。

「レオよける!!」

銀二は叫んだが火炎はレオの手前に落ち、レオを後ろへ吹き飛ばした。

「ぐああ!!」

（まずい・・・）と思った銀二はレオに向かって叫んだ。

「レオ! いったん逃げるぞ!!」

「あ、ああ」レオは震えながら返事をする。

「そこにあるツタを登れ! 洞窟が見える!

そこに逃げるぞ!!」

「わかった」そういうとレオはツタを上り始めた。

しかし逃げようとしているハンターを逃がすほど

モンスターは甘くない。

リオレウスはまたレオに向かって火炎を放った。

（ツタを離せばよけられる）そう思った銀二は言う。

「レオ！いったん降りろ！ツタから手を離せ！！」

しかしレオはツタを離さなかった。恐怖で頭が真っ白になっていた。

レオは「うわああああ！！」と叫び目を閉じた。

しかしレオに火炎はあたらなかった。

目を開けたレオには、焼け落ちる銀二の姿が映っていた。

銀二が地面に落ちるとべちゃっと血の音がした。

「早く登れ」銀二はそういうと立ち上がり、ツタを登り始めた。

そして二人は洞窟に逃げ込んだ。

「ハアハア・・・もうだめだ・・・帰ろうぜ銀二」

銀二はそういったレオの胸倉をつかんだ。

「何ですぐにツタ離さなかった？離してたら当たってなかったのに」

銀二は怒っていた。

「死にたかったのかお前！ふざけんな！」

確かにレオは戦いの途中で何度も死ぬと思っていた。

「死にたいんだったら別の場所で一人で死ねよ！」

俺は生きたいんだ！だから戦ってんだ！

戦って戦って最後には神竜ぶつ殺すって決めてんだよ！！

こんなところじゃ死ねねえんだよオ！！」

レオは耳を疑った。神竜といえばたった一匹で

「アギト」という国を滅ぼした世界最強の竜である。

そんな竜と一人で戦うと思ったらぞつとした。

「もういいい。お前はここにいろ。」

俺が一人でやる」

そついうと銀二は再びリオレウスのほうへ向かった。

「あいつ・・・馬鹿だろ・・・」

一人で神竜と戦うなんて・・・できると思ってたのか？」

レオはそう呟いた。

やけどで体がヒリヒリする。レオが怖がって戦えない以上、

銀二は一人で戦うしかなかった。

痛む体を無理やり転がし突進を回避する。

そして突進後の隙に銀二は斬撃を浴びせる。

そのときすでに銀二は覚悟していた。あと一発食らったらもう立てないと。

だが、モンスターはやさしくない。

斬撃の途中、リオレウスが尻尾を回転させ始めた。

（当たったら・・・死ぬ）銀二は一か八か飛んだ。

しかし、よけきれない。

（ここまでか・・・）銀二がそう思ったそのとき！

「バババン！」銃声と共に尻尾から血が噴出し尻尾が切れた。

リオレウスが苦しそうにのた打ち回る。

洞窟の入り口には銃を持ったレオの姿があった。

「一人でレウスも倒せないやつが

神竜なんて倒せるわけないだろうが！

ま、二人ならわかんねえけどな」

「えっ？」銀二は思わず聞き返してしまった。

「俺も神竜倒しにいくって言ってんだよ。

ほら、早くレウスやっちまうぞ?」

レオはもう震えていなかった。

「レオ・・・」

「動きを止めてくれ!

とどめさすからよ!」

そういつてレオは銃に弾丸を補充する。

「・・・その言葉信じるからな」

そういつた銀二にリオレウスが突進していく。

だが銀二はよけない。それどころかリオレウスに突進していく。

「うおおおおお!!!!」

黒天を前に突き出し構える。そして叫ぶ。

「黒天剣技『黒天神風』!」

銀二は体を低くしリオレウスの足元を抜けていく。

黒天が風を纏い、リオレウスの両足を引き裂く!

リオレウスの体が崩れる。

銀二は勢いをつけすぎて転んでいたがレオに叫んだ。

「今だ!!」

レオは銃口をリオレウスに向け構える。

「ブリザード・ジャツジメント」!

無数の氷結弾がリオレウスに突き刺さる。

その光景はまるでリオレウスから氷が生えてきているようだった。

「すげえ・・・」銀二がそう呟く。

その後リオレウスが起き上がることはなかった。

激闘！空の王者！（後書き）

戦いだけで1話書くの疲れました・・・。

今回のお話で銀二とレオが仲良くなれたんでよかったと思います。

今思ったけどこれってあとがきじゃなくて作者の感想になってない？
次回も見逃すなよお！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2122i/>

Sky Harts

2010年10月15日22時45分発行